

臨書学習における思考活動展開の必要性について

谷 口 邦 彦

Necessity for development of thinking activity in learning of “Rinsho”

Kunihiko TANIGUCHI

はじめに

書道の学習指導は教師(指導者)による実技指導を中心に展開される場合が多い。学習者にとっても「書けるようになった」という達成感、成就感が伴わない学習は書道の学習ではない、という先入観があり、これはなかなか払拭し難いものがある。このことは、学生が教育実習先で「うちの生徒は書くことが好きだから練習時間を多く取るように」という指導を受け、実技中心の指導案が大半を占めることから窺える。実技に関して言えば、練習時間は多い方が良いに決まっているが、授業時間には限りがある。ここで問題にしたいのは、書かせることが中心の指導では、教師が書いて見せる(あるいは手本を見て書かせる)など、教師の経験と技能に頼る授業に陥ってしまうことにあり、指導者がいなければ(指導者から手本をもらわなければ)書道の学習が成立しないという点にある。

高等学校学習指導要領にも長らく「生涯にわたって書を愛好する」という文言があるが、この中身は「書く」ことばかりではなく、「見て楽しむ」ことが含まれることを忘れてはならない。音楽や美術に比べ、書の鑑賞者が少ないと言われるのは、未だにこの学習過程の偏りが修正されないことに要因の一つがあるように思われる。

本稿は、高等学校芸術科書道の授業改善を想定し提案しようとするものであるが、大学における授業、さらに生涯教育の場においても応用できるものと考え、ここでは臨書学習における学習過程の改善に関して思考活動の展開の必要性を取り上げるが、創作学習においても、さらに鑑賞学習においても思考活動の展開は同様に求められるものと考えている。もちろん、筆者の日頃の授業実践にも多くの改善すべき点があることは認識しており、このことも本稿の前提となっている。

I. 思考活動導入の必要性

1. 臨書学習の目的

「臨書」とは「古典(古人のすぐれた筆跡)みて書くこと、また、書いた作品をいう」^(注1)と言われるように、書の学習の基礎にあたる。「すぐれた筆跡を見て書く」ことは、特に形臨においてはそのすぐれた筆跡そっくりに書くことでもあり、思考を差し挟む余地はないように見え

1. 例えば、和栗久雄『書道基本用語辞典』中教出版、1991、p.961に次の解説がある。「創作への段階として、形臨・意臨のほか、精習した古典をみないで書き、どれだけ修得したかを確かめる「背臨」(暗書)があり、做書といって、自分の会得した古典の特質を念頭にして書作する方法がある」

る。せいぜいその筆跡との違いを見つけ、修正していくことによって近づけるか、といったレベルにとどまる。

「臨書の目的は、単に模倣することではなく、古典を学ぶことをとおして、書の芸術の根源を探り、創作の秘密を学ぶこと、おのれ自身の書を創造することにある」^(注2)とも言われるように、「古典を学ぶとはそっくりを書くことにとどまらず、その筆跡の有する「すぐれた」部分を学ぶことであろう。「すぐれた」部分は、その古典の持つ、いわゆる「特徴」にほかならない。

2. 臨書学習における古典の特徴をあげるために

教育実習生の陥る授業展開に、授業の導入にいきなり「この古典の特徴をあげてください」というものがある。この発問にすぐさま答えられるほど書の古典は分かりやすいものではない。書道の学習過程の中で「書の芸術の根源を探る」ためには、学習者にも分かりやすいシンプルな流れで視点を整理し直す必要があるだろう。すなわち、図1のような学習過程である。

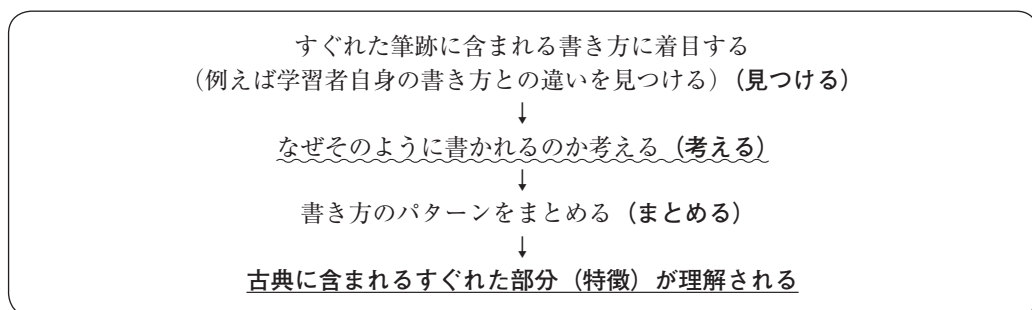


図1

3. 思考活動の一例 (九成宮醴泉銘の文字構成から)

『九成宮醴泉銘』(欧陽詢筆632)は明快な法則に則って書かれている。楷書学習のための基本古典の位置づけにより、高等学校書道Iでは必ず取り上げられる。

池田毓仁氏は『中国書法に学ぶ(第1回・楷書<九成宮醴泉銘>①~④)』^(注3)で、九成宮醴



泉銘に見られるいくつかの法則をまとめた。「いろんな視点から観察することが出来て初めて発見できることで、初心者が見つけ出せるような内容ではありません」と池田氏は言うが、その一字一字の文字構成の工夫を見いだす活動を抜きにして、九成宮醴泉銘を学習する意味はないと考える。上述のシンプルな学習過程の導入により可能となる。

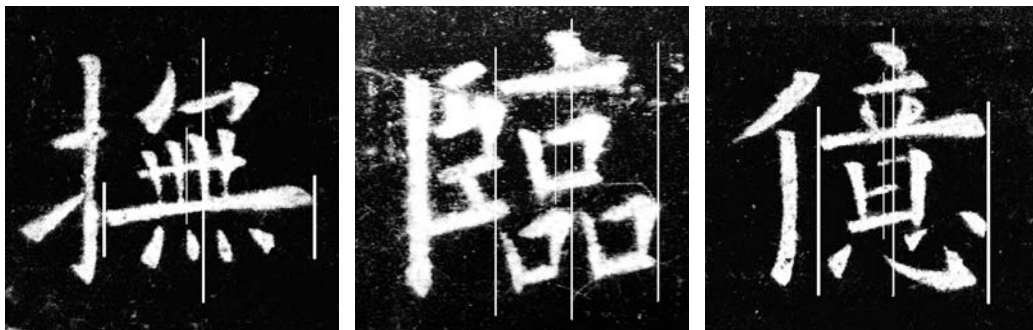
例えば、高等学校の書道教科書に取り上げられる部分に「立」字がある。初めて臨書するとき、この字に含まれる工夫を見出すことは、池田氏の言うとおり、無理であろうと思われる。4画目までの部分は、全体の中心より左へずれている、工夫

2. 前掲書

3. 池田毓仁「中国書法に学ぶ(第1回・楷書<九成宮醴泉銘>①~④)」『新書鑑』349, 351, 353, 355号 雪心「新書鑑」編集部 2004, 2005

である。まず、このことを「見つける」活動が求められる。

次に、なぜこのように書かれるのか「考える」活動が求められる。そのためには、たまたま失敗したのか。他の文字に着目してみる必要が出てくるだろうが、失敗したのではないのは同じページに出てくる他の数文字を見れば容易に納得できよう。上下の関係の文字では、中心移動が施されていることが見い出せる。



ここで想定される思考活動の一例に、「なぜ中心移動が施されているか」があげられよう。小中学校書写における「字形の整え方」では、「中心をそろえる」ことで実現される字形の整いが、ここでは違っていることについて考えさせるのである。この答えのない思考活動こそ、どこまでも広く深い書の古典について学習することだと考える。

Ⅱ. 思考活動展開の必要性

1. 書写と書道の目標の違いから

小中学校の国語科書写は、言うまでもなく、国語科における学習活動（「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」）に関わって、言語活動がスムーズ行えるよう「書きやすさ」「読みやすさ」について学習している。一方、高等学校国語科書写は芸術として、文字に含まれる多様な美を取り扱い、感性を養うことを目的としている。

学習者（特に高校生）は、書写と書道との違いが認識できないまま、書道学習に臨んでいることがあるように見受けられる。思考活動を展開していくことができれば、自ずと両者の目標の違いは明らかになり、学習者の混乱は解消されるものと思う。言うまでもなく、書写学習においても思考活動は展開されるべきであるし実際に行われている。

2. 美感との関係から

学習者（特に高校生）は、書写学習（例えば上記の「中心をそろえる」ことで実現される字形の整いということ）から、文字から受ける美を整齐美として捉えている。書写教科書所収の課題文字（いわゆるお手本）が絶対無二の書き方であり、多様な書きぶりである書の古典には違和感を感じるような見受けられる。また、九成宮醴泉銘など上述の通り、様々な工夫が施されているにも関わらず、整齐美との違いが見い出せない実態がある。

確かなデータはなく、現場から指摘を聞いた経験があるのみであるが、もしこのような実態が多々あるとすれば、書写から書道への接続の面での課題でもあろう。入学後間もない時期に、上述の九成宮醴泉銘で思考を鍛えることは、書写から書道へのスムーズな接続という面でも効果か

期待できる。

3. 楷書の字体の違いから

筒井茂徳氏は「楷書を習おうとするとき、ことに初心者は楷書から入ることが多いであろうが、誰しも碑や法帖の字体がふだん見慣れた活字体とは点画の構造が多少異なる場合があることにとまどった経験があるに違いない」^(注4)とされており、高校生や大学生を初めとする初学の者には日常普段見慣れている、例えば活字等との違いに戸惑いを覚えることも多々あるわけであるが、ここでは、書き方の違いと同じ扱いにより、思考活動に組み込んでいく方向で考えている。

2. 教員養成の面から

書道科教育法（大学3年）の授業で「九成宮醴泉銘で何を学習するか」^(注5)について学生があげたコメントを見ると、次のようなものがある。大学1年時に九成宮醴泉銘は学習しており、文字構成の工夫については考察した学習体験をもっている。A群B群どちらからも真摯な姿勢が見て取れるが、B群のようなコメントは思考活動を経験することによって初めて出てくるコメントである。

<コメント群A>

- ・点画の接し方や、空間の取り方が絶妙なバランスで成り立っており、字形の構成を学ぶ上で最適である。またそれが、これからの創作活動に活かす事ができ、個々人の芸術意欲を高める事ができる。碑や拓本にふれることで、中国の書道文化に関心をもてる。
- ・現代の正式な書体である楷書体の九成宮醴泉銘には、活字がありふれた日常生活の中で感受する事が困難となりつつある文字表現の了見を広げさせる力がある。また書写学習をしてきた生徒にとって、常に一定の線質を保ちなおかつ厳密な規則にそって構成された文字のつくりは、まだ書写的な文字にしか親しみのない生徒が、今後一定な形にとらわれず様々な個性や表現方法を認め、美的価値を極めた芸術的な古典を研究していく導入単位として最適である。

<コメント群B>

- ・古典の構成は必ずしも一致しているとは限らないが、楷書の極則と言われている九成宮醴泉銘の臨書や鑑賞を通じて、巧みな文字構成や用筆法について自ら考え気づき身につけることによって、これから他の古典などを学習する際に、自ら考えて特徴をとらえることができ、古典で学んだ表現の多様性を作品を作る上で自分の表現として生かしていけるのではないのかと思う。
- ・古典や文字の字形の良さを自ら見つけ出すことで初めて楽しい・おもしろいと感じることができると思う。ただ臨書するだけでは何も学ぶことができず、書道の良さを知ることができない。生徒には書道の良さを楷書という最も身近な書体で、そして楷書の中でも最も文字構成の美しい『九成宮醴泉銘』を通して気づいてもらい、書道を好きになってもらいたい。『九成宮醴泉銘』の文字構成を分析的に見ると、文字の中の空間を広くすることで文

4. 筒井茂徳「楷書の字体」『九成宮醴泉銘』中国法書ガイド31、二玄社、1987、p.14

5. 2008年前期「書道科教育法Ⅰ」授業における実践から。受講者14名。

字を美しく見せようとしていることや、文字の重心をずらしてもちゃんとバランスがとれていることなどがわかる。見ただけでは気付かない文字構成の魅力が『九成宮醜泉銘』には備わっているのだ。生徒はそれに気付いたとき、書道の見方が変わり『奥深い書道』を知ることができると思う。また、『九成宮醜泉銘』を通して学んだ文字の美しさを、普段実用的に文字を書くときや生活している中で様々な文字を目にしたときなどに役立てることができると思う。ただ文字は文字として見るのではなく、文字の中に潜んでいる美しさや文字の背景には何があるのかを考えることができ、文字を通して自分の感性を豊かにすることができると思う。 (下線筆者)

II. 古典の特徴をあげることについて

1. 原則を見つける

古典を授業で扱うためには、特徴をまとめることは必須である。教育実習生が導入として特徴をあげたい気持ちも理解できる。特徴とひとりで使用されるが、ここでは、古典の筆跡に見られる共通の書き方としておく。学習者は書き方の共通点を学習するのであって、これは原則とも言える。千変万化の古典の姿態を原則でまとめるのは不可能のようにも思えるが、これにも答えはなく、この追求も大切な書の学習であると言えよう。長い時間をかけて作り上げられた書法であるからこそ、軽率な筆法ではなく、それぞれに究極の筆法が隠されているだろう。原則は直感的に見出されることがあるのを否定はしないが、すぐには見出すには難しい場合が多い。

次にあげるのは、大学1年生のコメントである。九成宮醜泉銘を見て気づきをあげている。できるだけたくさんあげるように促す。

<学習者1>

- ①「九」の一画目は長く、二画目は上あがりに書かれている。
- ②「成」の四画目が長く書かれている。
- ③「侍」のへんとつくりが上下にずらして書いてある。
- ④「中」の二画目がはなして書いてある。
- ⑤「郡」の最終画が長く書かれている。
- ⑥「公」の二画目が上に寄って、字形がななめになっている。
- ⑦「山」は、縦画がすべてまっすぐに書かれている。

2. 原則から原理へ

原則を見出すことができたならば、そこで止まるのではなく「なぜそう書かれたのか」について考えたい。想定される要因をあげると次のようになるだろう。

- (1) 民族性を含めた筆者の思想や考え方による
- (2) 用具・用材による
- (3) 時代的な背景による
- (4) 国や地域の背景による

＜学習者1＞

- ①は、横長く見せて上下の空間を広々と見せている。
 ③は、縦長く見せる効果がある。
 ④は、中の空間を広く見せる効果がある。
 ⑤は、空間を広く見せる効果がある。 (下線筆者)

先の学習者1があげた気づきについて自ら考えたのが次のような内容である。もちろん科学的に分析したものではないが、学習者なりの原理が見い出せている。すなわち、「広く」ということが共通点としてあげられる。このレベルのこと学習者自ら「原理」

としてまとめたい。

3. 原則をまとめる

技法解説書にはさまざまなものが見られるが、概ね原則をまとめる形で扱っている。例えば市澤静山氏は次のように原則をあげている^(注6)。

「＜閣＞＜閉＞は日本の縦画が内側に湾曲して、胴が引き締まって見える。顔真卿の外側に湾曲した向勢に対し、背勢の例としてよく引き合いに出される文字である。そのため九成宮はすべて背勢であると思ひこんでしまいがちである。たしかに左側の縦画は内側に反っているが、右側の画は反っているように見えるものの、筆画の内側は直線である」「欧陽詢の表現意図は直勢であり、筆勢によって内側への反りが生じることがある、と理解しておくのが妥当であろう」「転折部分から垂直におろして下を細くしている。これは他の部分との配合の比率を考慮しつつ、口部の中の余白にも注意して書いているのである」(下線筆者)

今一度、思考活動の一例で取り上げた3字を取り上げ、原則・原理について補足したい。

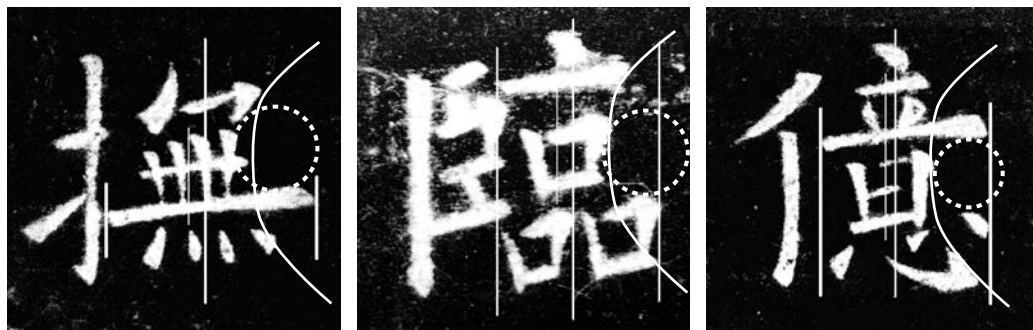


中心をずらすことによって生じた、丸印に示される空間が九成宮醴泉銘の書き方の原則である。なぜそう書かれるのか、についてまとめるのが「原理」となる。

予測の域を出ないが、右側にできた空間によっていわゆる「背勢」の文字構成が、ここでも表現されているとまとめられよう。実際の授業では、個々の学習者によってまとめられた原則を、教師が原理として「まとめ」ていく作業が必要になる。図1で示したように、ここまで行われてはじめて学習者に古典の「特徴」が理解されることになる。

形臨を中心とする臨書学習では、そっくりに書かれることばかりに目が向きがちであるが、こ

6. 市澤静山「九成宮醴泉銘の結体」『九成宮醴泉銘』中国法書ガイド31, 二玄社, 1987, p.30



のように学習過程において活動をシンプルにまとめ直すことで、思考活動を中心とした質の高い書道学習へと転換することが可能になるものと考ええる。

おわりに

今井凌雪氏は「欧陽詢の書はだれにも分かる理論があり、それに則って書けば誰でもがうまい字が書けます。しかも、そこに見られる法則は楷書だけのものではなく、他の書体にも応用できるものです」^(注7)と云うが、ここに「理論」とあるのは、「原則・原理」のことである。原則で統一されている九成宮醴泉銘は、理解されやすい点で高等学校書道Ⅰをはじめ楷書の基本教材として格好のものと言える。

本稿の学習過程で行った実践は乏しく、データを蓄積できていない。今後は思考活動展開による学習効果を確かめるべく実践を積み重ねていく必要がある。データに基づく実践報告は次の機会に回したい。

参考文献

- 余雪曼『書道技法講座1 九成宮醴泉銘』二玄社、1975
 加藤儂一『書のすすめ』玉川大学出版部、1998
 和田圭壮，勝目浩司，秋元正成「書道教育における鑑賞指導の一考察－分析的鑑賞を中心として」『教育実践研究』（15）福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター，2007
 和田圭壮，勝目浩司，服部一啓「書道教育における鑑賞指導の一考察－分析的鑑賞を中心として」『教育実践研究』（17）福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター，2009

[2009. 9. 28 受理]

7. 今井凌雪『臨書を生かす上巻・楷書』講談社、1995、p.28